

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80

普請會所
御定書之
割場

經濟學部
研究室
5
240

5
240

經濟學部

人冊

東京帝國大學
經濟學部
研究室之印

普信會所
劉陽
研究室之印

一 地子家数多而各執領地安望し者以相對引糾とせし
ハ、何方に在る相後事

一 親子兄弟一而望地安望主下有人とくを南に北上に就地子
下下有事

一 親疎因縁或兄弟にわりの名居地安望知所過り分る度は
主下主下は若從公義御立上り自分惣地安望仕る

其節主知所過りし御余分主上事

一 死去人跡目不言 仰付る名居地安望主上事

一 上り陸安家と外極本ありさせし乃安望惣地安望主下主上事
勝自安望主とせし主上事

一 居地安望主内地子主望主多る主陸浦不跡主上主安望主内
地子主望主多る望主分主上事

一 地子浪人評定出系退轉毎年逢吟味悟面記淺野地
主市主望主菊地八代主上主相後事

一 今度中道場切見廻り性還さいりある極悟理了
主 淺野陸安望主評定出系主上主後主記今主相後事

尸骨重

寬文元年不會不配張成丁巳

一傳町院其外陸浦主之通免不作らせ一戸以爲之了後所
而爲此中戸以爲對馬國備玄蕃民部正一相所保護
爲城主自今之難改而陸院云居而といひ今之刻爲
役人請に被修理する事

寬文元年（1661）田舎に五郎張郎

一、想、竹、笛、切、あ、く、不、了、難、切、く、人、を、煙、臺、を、入、可

丁巳竹卷之事以疏之明史丁巳事

寬文元年（所金）所配

一、魏瑞生、李紀多等一切不良行為一律革除。

寛文元年丁未町金五匁

一、力作求是，惟師子之骨，永下地，成親組，終台，其後終

李汝安先生

臺方所定之石距
知所為者不可不

上二片四片拾石通下二片事

一子百片

三子石片九子石通

一子百片

八子石片七子石通

一子百片

六子石片八子石通

一子百片

四子石片三子石通

沙子九百片百石通云々知新云々云々拾石

上二片一子拾石通二子拾石

一子百片

沙子九百片沙子百石通

一子百片

沙子八百片沙子石通

一子百片

子九百片子百石通

一子百片

子四片子百石通

一子百片

子石片八子石通

一子百片

七子石片六子石通

一子百片

四子石片三子石通

一子百片

沙子石

一子百片

百石

一百四十餘家

一七餘家

一六餘家

一三餘家

一七餘家

一百七餘家

一千四百餘家

九餘家之六餘家連市切若百餘家

六餘家之市切若之六餘家連市切若者
母若市切若之用者之六餘家之內之六餘家
此六餘家

市切若者之六餘家連市切若之六餘家

市切若

人持下市切若百餘家

所醫所並

市切若之六餘家

右之市切若市切若之六餘家連市切若之六餘家

連市切若之六餘家連市切若之六餘家

右之市切若市切若之六餘家連市切若之六餘家

市切若市切若之六餘家

今村氏部

奥村氏部

津田氏部

市切若

市切若

一下阻礙之處與力相在三字石近。知終焉之。自分地。然。

但方強敵易親

卯月廿一日
百法

象陽成立甲子引神堂

一落千丈

卧月

一百五

即百六十四

但
之
初
乃
時
沙
恰
也
近
下
有
沙
恰
之
石
之

書一

一百零五

三音

一
計
而
石

三百六拾目

一斗石

田百六拾圖

二音石

人而用

一、音之聲也。音之聲也。

晉

一 正而少給石六石五斗

十月

一音之聲石而石也

八百餘年

一書齋居八十石

九百六拾四

一
八百九十九近

五十四

一九百六拾年石道

三貴部同

一子之孫子三石也

三貴田七拾圓

一子三石子石石石

五蘭六十八拾同

一子而為孫子七而石也

壬午九月廿四日

一子音之於子九百石

沙貢而八拾月

一子九百六十六

訓育部

一
沙
子
森
原
沙
子
三
音
石
地

弘治十七年

一說子音餘反說子音石反

三貴百用

一 諺子書之於石

三首四首

一、沙七、百、千、萬、沙、九、百、萬、

二百八十五

一 歌子九首 卷之三 石述

平貴沙而路同

許世英

一 九 零 年 之 春 侯 廷 英 于 榮 堂

部
人
卷
目

醫所詮全錄五

一 各像之像也

計四回

一 各像之像也

而各回

知所各像下家所生

一 是時文所解解指所生

一百回

候是板前所大工持除場

一 即能小人以各像之馬云 七拾回

一 能空城中小松人引賊了者右當三割是後下事

一 全活家所出能空城中小松人引賊了者右當三二一

言下事

一 全活家所出能空城中小松人引賊了者右當三二一

一 与力又家中与義右當言下事

一 全活家所出能空城中小松人引賊了者三割是後下事

町人

一 役家前口言間

下拾回宛

一同言間

下拾回宛二階也

右系通引科下事永澤全忘下有文解以上

萬治三年七月十二日

今改民部

奥村周暁

各因對焉

臣補學行

覺

一親臨目言 仰知兄文今以面談親臨安否
言及兄文應知所言 仰知家叔訓育言言相感
自代旅地之言語及地子之言言事

一一 陸處士居任龍溪陳如之過吟味兄書分惠步後館
地語此地子之言中肯矣夫之介隱陸處士別而之亦下之矣
步後事

一 沛加增天下之面天下無處不呈介字相後日景親知兄文之
介之仁之肉死之人跡同吾之介之天下無處不呈介字

山月亦白
萬治三年

晴窗玄菟

奥村周情

前因對馬

公發個應言兄弟致謝之文
 官為志事

一憩占力脫安、後向後人、
以系、所離近臨海、
所定、家

致檢來書力陳安旨相度事

一七拾家

惜至小兒
亦為捕鼠

一
夕
疾
步

以小人之心
 度君子之腹
 所大工

古通下

右年表中之所記西曆一千九百零七年

覺

一親跡自兄方三言 仰知行言人 居處安寂 不待而年不收

收納以希照會取領此後自書付取次取已另交公館在何云云見矣

一二五三六七八九十

只今兩年收納不仁以爲書付新次尸上以

一親兄父之孫立少名張亞公名右國師之事

一 村有異風，乃力冲鷹，鋼以家，以爲其困，省右國，乃之事。

一昨來
已如面
他國者
而論
抑國
之
者
亦
祝
兄
矣。

一 方知有之而無其像也言其字石以上上處安下處安あり
成敗之有無但言石以上方有之人も自分知るるを
此處一處の方知有之に言ふ事

一 神領地あり外諸之に家領の地此處より上より下へ
而るに其方知有之に言ふ事此處可指上りて其地
可任事

一 許地有之地方知有之に言ふ事此處由諸より上より下
あり下地有之に言ふ事此處有之に言ふ事

一 下地有之地方知有之に言ふ事此處有之に言ふ事

一 地子町より上より下地子町相違に言ふ事但上地有之に言ふ事
下地有之に言ふ事

一 地子町より上より下地子町相違に言ふ事但上地有之に言ふ事
下地有之に言ふ事

一 下地有之地方知有之に言ふ事此處有之に言ふ事
地子町より上より下地子町相違に言ふ事

一 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 一 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 一 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 一 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通

寅
二月廿二日

河原通 河原通

河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通

河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通
 河原通 河原通 下 小立野 元 河原通 町 至 三 一 河原通

辰
九月十二日

横山 元馬

奥村 因幡

谷田 對馬

下多 安房

河原通 河原通

一 百治部年 御定書御分條より下陸部後注記二年御年
 不仕明並よりより上旨記 作由より自今後不
 及至河治より自是後二年三月記 仰出より向後可為
 手記より上

己未 二月廿六日

奥村因幡

前田對馬

横山在馬門

加多西房

評書後注記中

一 評家中書後注記中一カニ事
 一 後高知知三ツ方家城中能町より毎年二月中二相篇
 与カ知平均同前但寄親よりより一カニ事
 一 人持評馬廻り平均より以上御出後注記人より
 出より同カ知以下事 是よりより評後一カニ事
 一 役人入よりより出より平均指記より分より後注記入用
 限指記よりより事

一 寄託主役者親手石内より与力を借し為限役事

一 番店場を過仕果て役人十員五人を相立とて以後番中惣か
ふりある一但限役を止む若し主人と死なば惣か
りの分引二丁事

一 病死し役人より自限役を果す以下五丁事他國に果て役人
替人不及を事

一 他國諸役人惣替りて石内役を仕る自限役無事
一 市國より遠く遠方へ役人内帰る十丁替仕る自限

是又割場を載二丁事

一 石切を主人より相立事

一 是仕役人有る者より先より番店金所より新日替
をり見計りて二丁内出入り相立之日以後も割場をり以
相違米進出二丁但番店金所より仕役人より先より
見計りて相違二丁事

一 町番店役人より初年一月切替役人より割場をり以
て是算用事

土波指下是く跡歩指下は明春土浪名下り行事

一、定校者別月大一人爲一組之計人死切者則計人立組三人刻傷處

藏一二三年

一印馬廐少阻三定校七人爲判計計人切自名計人劉陽德載一子
一四陽校後人二十人印一人免但舊後不保人人十人出外

一會當十人一角五元

一 於石山刻出石中有一方同煥也但石中有一

一葉新黃下葉新
咽淚羞紅未慙增減見思
思存一斗何辜

一去呼不之也尸遠近徑看吟味之後下筆欲言先之而後
人相繼而後下筆

一 早朝、大雨、清水、千舟、萬花、輕微、節、以、生、巧、刻、場、近、有、光

之者以今指張王滿假人一體還少西隣角隣以爲善類

新歲早之時先無出不歲時至之日所於紙上

古

一息之靈在人，使人相遠，田之之者，余之靈，使人相

一 金沢公金都江所荷物賣目三月八月近至人七貫目通中
日新官九月公賣近大賣目口數丁七廿所荷物賣目略々右口數
一月一日宛引下丁年

一 限役賣物他垣九右馬ノ小幡七市賣所中月平賣方右年
後限賣目見取調下丁年

一 限役每年四月二十二月二十二番迄上三下丁見取
相得去三月二市宛加利息上取下丁年

一 限役小入角限役度市賣所賣目見取方右丁年

一 普法道具振賣所廿度市賣所賣目見取同役賣所神保
通助系人持組限下丁年

此令役用道具後賣所二人持組人持下丁年

今年八月指除日

一 可賣之賣物右所山人四月迄至、普法賣物分賣
下後賣所限下丁年

引役し許定

子石

人持組限

朱
 小松之宮腰町
 寛文二年人台石引

人台石引

上車馬町
 寺社町
 金沢町
 小松町
 之宮町
 宮腰町
 大消町
 沖馬廻町

朱
 近奉小沖女月場加候

朱
 近奉小沖女月場加候

定高組
 占力女
 組
 朱町
 美月場
 諸方美月場
 倉不町
 沖使方町

三石

沖代官

沖國之内使
但還勇之内致
一引

金限云飛草行

金限少飛草行

該方々上金限
該方々草行

出限草行

与力明知限草行

沖納戸草行

沖武具馬具草行

与力武具草行

沖方矢浪炮道具
草行

沖浪炮玉葉草行

刺揚草行

無法道具草行

作車工草行

同懷身与力

校木事行

汗城中破損事行

介操破損事行

割傷普德道具事行

堂形事行

宮腰印吉 吉之

草破 花事行

同下裁許

只今小松汗馬廻書頭
才配信

加丁弟美雜敷
事行

小松事行

諸事
持不

同下裁許

殖事行

汗馬事行

山事行

寺物事行

公事場上花事行
系長次

各役

細工奉行

斗外奉行

斗小將頭

村手頭

長風頭

女中

斗小將

斗小將

寺社方

湯居頭

斗小將

郡奉行

番頭奉行

村手

長風

作事奉行

汗鷹亭

汗醫師

汗茶堂

金法町同心

奥羽小代官

七尾駐立小代友

兼用者

汗鷹匠

料理人

赤沢者

出八郎

十村肝美

穴生

他國印使役引

一 大才小才より役引

一 他國逗留士々月共人十右引ノ案十二月ハ該處三月迄也

訃告日 訃告 訃告 訃告 訃告

一 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告

一 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告

一 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告

右 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告

万治三年正月朔日

今 叔 氏 邦

奥村 周 暢

前 田 對 馬

訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告 訃告

追加

覚

一自他國に當分し許使等々 仰有候人難引分は候
相動許用仕廻張席日數人 許定三歩に但限は月三
引下事

一市役迄是下而之又限代系引下事
一死去候人其一人一ヶ月分は厚き元八味で佛限役日
等月其下出但候人其又勝は此下事

一市國より許使一夜泊り多し 仰定候引下事
一市親を候し力い市親に組頭は付使に相動事
一市親を組頭を候し力い市親を其無任事 仰定事
一市親を候し力い市親を其無任事 仰定事
一市親を候し力い市親を其無任事 仰定事
一市親を候し力い市親を其無任事 仰定事
一市親を候し力い市親を其無任事 仰定事
一市親を候し力い市親を其無任事 仰定事

一倭人河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

一下其河石旁舟中系刺問年大つ條々外巧系之倭人其
之重好如之下其河石加刺相見之其時河國陽以倭人
法之事

吉河 仰其通至相遠二其河石

万治三年二月十日

仰其通至河

河陽其河

河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

一河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

一同河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

一同河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

一同河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

一同河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

河國内省賀一夜一人退去屋瓦之事

万治三年二月十日

朱書

寛

一 市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり
 一 市用金 作付面之減市無きより其目は保入一力なり
 右之通 丁は得る事以上

万治三年正月十日

市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり
 市用金 作付面之減市無きより其目は保入一力なり
 右之通 丁は得る事以上

八月十日

一 市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり
 市用金 作付面之減市無きより其目は保入一力なり
 右之通 丁は得る事以上

寛文九年二月九日

寛文九年二月九日

寛

一 市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり

市番店

市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり

市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり

一 市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり

市番店後部面之市用金 作付者其目は保引金なり

右ノ通事 仰公案ノ下得テ之以上

寛文抄年ノ有旨

定

一 候引之面ニ殘知子石ノ内主ノ為限候事

一 御島廻組既立江戶相取ノ御下主新也之ハ御定ノ

為ノ面石引石引主ノ主之ハ之面石ノ主限候用主可

下主事

一 候引候入 御定ノ自限ノ十六日迄書付出之候仕之可

改換候入日限延引之旨 御定ノ未進限並候限ノ主但十

旨ノ内御定ノ主之主主者ハ主主ノ主主用主事

一 主候之面ニ江戶主主海候人ニ主 仰公案ノ下 御定ノ通事候

一 主候引事

一 江戸道中三月八日迄日數片道十日九月八日迄二月迄片

道十二日迄事

一 京都道中三月八日迄片道五日九月八日迄二月迄片道

六日迄事

一 序下役人扶實山人之議威分同化國之食為二相事
 一定扶實到月切子系增步之食為立為事
 一 不依何事休下役人出人之相事
 一 許善法不威利拂解之役人出人之相事
 一 訓備無月之役人出人之相事
 一 許善法一仕但之役人出人之相事
 一 入用限除下之役人

一 序下役人扶實山人之議威分同化國之食為二相事

一 許善法不威利拂解之役人出人之相事

寬文三年正月廿日

許善法在府中

覽

一 序下役人

京都對馬

一同

奧村因幡

一同

津田玄菟

一 序下役人

條崎玄菟

一子石引

一同

一三石引

一四石引

一五石引

一六石引

喜後

市保後廣

津田之廣

今村助廣

不破八郎廣

根来屋廣

市田刑部分力

小幡宮内

市田丹後

市田主殿

堀市市廣

伊度内膳

菊地大學

長谷川惣三郎分力

長谷川伊左衛門

長谷川惣三郎

有通商印書館發行
子月八日

前田刑部

前田平兵衛

永山三右衛門

田伏久米助

田伏清右衛門

前田對馬

今村民部

奥村因幡

津田玄菟

市次馬

市廣式葛

養有葛

足燈所

新島組市使頭

覽

去後

二
音
尺
斤

許徒取

改化事

奧川少

許奧少將様目

許近所書

葛巻新屋

小松町飯島三人主馬中

定高頭

二
音
尺
斤

小松町書

宮腰町書

七尾書

高島書

奥津書

定高川馬廻川書

組外書

御借浪書

以書信道與調其行

長拆每谷話事行

有通許書信便引下

易書
右年家中小信之紙面名下後以寄書

許島廻組許島既更許便後作月今許書信便引下

定書以書廻組外書以書既更下三石引下作月

下石引下

癸酉山月大合

奥村周情

横山筑後

村井出雲

前田駿河

村多安房

高田久全信及

津田治三信及

戸田清重及

勝沼市殿 御所 今 許 番 後 任 引 之 交 各 書 付
入 御 洗 江 戶 許 廣 武 門 人 年 通 去 度 三 月 辰 辰 上

癸酉 年 九 月

前 田 強 河 守

横 山 範 後

村 井 出 雲

奥 村 國 煥

本 多 安 房 守

三 富 之 吉 助 氏

津 田 治 三 郎 氏

戸 田 隆 策 氏

覚

一 石 切 路 道 具 等

一 弓 矢

一 弓 矢

一 加 梅

一 小 弓

右件用之今更又若下月分事 作成の上

水無草二月廿日

奥村因幡

津田玄菟

石田對馬

割傷事の中

覽

一足怪如系長柄許休廻許差示少者家中候人へ玉寄事

^{此書}許休廻三十人廻り次支配之 作付唯今此外少者

文解信

一足怪し候へしむかひの據持ハ下月分人へしと知事
為つと有ハ一有因據事

一足怪し人家中候人へし休日一月三日多へしと知事

二月四月三日入節白許一門極方許事忌以法事を刻

力付下下但多し許用有と刻事 各別之事

一版書し多し候事此ハ見付金前ハ損破者下月事

^{此書}版書し少者百人へし人並に版書 許定之此後金前

不及預後の足程に候事

一遠路許便を以て前二日馬席二日加休する候し使を
前日休息を以て三日馬席四日加休する事

一東城後より田近し許便を前日一日馬席二日加休する前日
休を以て三日馬席三日加休する事田より許便極に
近し加休する事

一教書に伊月より陸路許給事足張より教書持
り着許給事去る如く六月迄は日暮用迄毎夜七月

末は皆て下事

^{此等}一教書持りより許給事八月迄は日暮用迄毎夜返上
九月朔日より皆て下事

一足身より暇に有る許給事日暮用迄は返上事

一病死候もの候より暇を以て有る許給事其日より返上
其後より皆て下事

一範舎人より身より許給事其日暮用迄は返上事
其後より皆て下事

修系引續分一書事

一 火事より刻は煙の着刻場集並人拾人二十人花組を分
火消道具を力加勢馬同場主萬民部指系次等滞後
了事

一 風吹より刻は煙人足五通 印城より出たて此限のつけふ
せき了事

先書
風吹の時分刻場より出たて候事此限

一 江戸より早飛脚来合より六二時此刻限を在りて未だ

品より江戸慶安よりおろし者い限限の角おさへ了事

先書
たやく未だ候より刻紙評定通刻限應い以慶安限

了事

一同中飛脚来七冬九日此日限を遅より路限の角おさへ了事

一同常より飛脚来十日冬十二日此日限を遅より路限の角おさへ了事

へ了事
了事
了事

一 江戸より早飛脚来二日三時冬三時此刻限を在りて未だ
より江戸慶安よりおろし者い限限の角おさへ了事

第書

丁亥年系名付多の引紙 御意通刻限 意に廣く海軍の

一同常しく飛脚其日冬六日此日限人運来しく路限三月内

三八二一車

一城申據に早飛脚其一日三時冬一日八時八月日限三車

一足快系限一日三十分限死する事是上仕有る一四十分可

系下事

第書

系限に五十分以上限不系下

一足快病人三日以内一日三十分限死系限五十分限

煩き給ふ三日以後不系限下有秋死事

第書

病人に後屋吟味給ふ事此分不系限五十分限

一長柄病人に定休日外不系限一日六十分限五十分限上仕

有るに御座る一日三十分限死する事

第書

系限に五十分以上限不系下

一不系限月切に五十分限五十分限八月日限八月日限八月日限

月を越えに御座る一月三十分限七十分限八月日限八月日限

一不系限八月日限八月日限八月日限八月日限八月日限八月日限

下村一重新と書付下事

一 沖波村と云致し之の死去人家の妻子に下村波一重新
重新近早進つて教書し 仰身有或不用之候も致
所候所々有故に候し下波に近寄つて諸指事

一 金谷所丈作月二石仕り刻其の人指云書書を加町
余前より云

一 臨方の人を逐吟味諸事行と相波沖用相痛く等
人々上つて事

一 沖波諸を旅人有る余前より諸以来沖波諸と候用之
立与有故候下事

此書
沖波諸を拂給うる刻川西川除由石方下事
只今余前より諸の事無故

一 沖波諸を三日外方体刻川人教書并余前より押切
を致進つて事

此書
只今余前より押切仕事無故

一 遠所より沖波諸を刻川品々見計内帰る方体

下書

朱書

肉端与为体尸美无匹

一父母兄弟妻子兄弟人田之事

朱書

書
望懷之弟目此海三以歷江少者父母七日壽子兄夫乙日

王中賢

一
高深制
江城中
不
雪餘
七
事

一江戶之時刻城中爆足書洞一相後事

右
仰出
相遠
有
弓
安
去
入

萬治沙年序報日

今校民部

津田玄菴

奥村因幡

音因對馬

金氏刻

早飛脚印廣免下印定

五時

拾
句

計時

拾分

三時

抄拾目

四時

三拾目

六時

八拾目

八時六時之浪言同事之聲吟咏以屬書達一
生年之抑安月陽矣割當之書出於此之右則
許分月陽抑是書之內此紙面之而為書之海事

六時

八拾目

七時

八拾目

八時

七拾目

九時

八拾目

十時

八拾目

但十時之上三時十時之抑應之書下以江公極本之
外近之而早飛抑抑應之抑定之公

右早飛抑之書者抑應之江公同事之書下為極
向後此定全江公江公極之抑國他國之書小應從
法劉昇抑應之書相後之書

未
二月十日

香山織部

横山外記

奥村内匠

墨崎基七

服田九三郎

御安用場

右通記 仰後系 丁長石下萬今事

御安用場

淨割場

覺

一本系是怪年寄病人入習服之世石下萬今事

付札

本庄是怪沙汰九像系下寄年寄代人言 石出割場

是怪至沙汰去像代人言下殘并石下寄寄之者下

以番相勤下只今新系是怪沙汰像系下并殘本

石下并寄有系寄系之者下後并番加勤下寄上

卯
二月十日

横山外記

一新糸者毎年改印用之立方安有無替下事

一足櫃る無時分三やうかんちやうあつひう百五
少くけいのうもくあひかいふ成るの二無用但品
一相済事

丑二月廿二日

割傷

沖家中人持廻り而増礼之刻且又糸系祓佛開帳
なるとかやうの人群集りて見物人ノ事不々たる留後ハ

町奉行ト町足櫃出之致因下付合々 作由る割傷ハ

足櫃出之ハ簡拂ハ去々町足櫃不足之刻を以町奉行
より割傷を相達り来新次方足櫃町奉行止下相
後名上

庚申三月十日

割傷事新中

賞

一該割傷支配係足櫃候沖持簡沖持此外不傳

世覽

一 金谷山松日開並院寺人并七合之屋

但當室々石約以田開之九合苑之事

一 石川河内能久郡村之田開寺人并七合之事

一 熊別城中田開寺人并六合之屋苑之事

右之通言丁村以系并並院寺下之刻也田開並院家

下有石并者也

寅三月廿八日

石田七所書

藤原助隆

好夏内膳

割場草紙中

早飛柳之文汗廣免飛柳之丁後言 汗是田開早飛以

時令汗廣免寺丁至寺上時令寺之飛柳之寺仕家室前

柳之寺上相遠は向後先親方より寺出廣免寺上丁後言

以乃寺早飛柳分ハ 柳之寺刻限ハ早飛寺ハ汗廣免

天下通系者ハ常ニ死所ニ在リ

未
三月六日

江戸劇場評定書

一 南地ニ寄親ニ是様切頭長柄洋小人許付廻家中
役人下駄又洋車

一 是様ニ分テ一むかひの擔持ニテ有ル人ニ一々
け着かつき有リ一様用捨車

一 是様以小人家中役人ニ付日々三月ニ方三月外金

三日三月三日人節分洋一門様ニ洋車忌路江戸法
多々刺傷体ニ事

一 洋番法多々三日外外体ニ刺者人殺害甘金有リ切
金有金ニ事

一 飯場少座敷ニ候ハ振子ニ志ニハ見計會テ相違ニ事
一 病人者ニ洋技方押下ニ上乃病人ニ違合味煩
難ニ給テ皆下ニ但早建中役付者有リハ足付居
國ハ相違或態ニ事

一 呈候小人未進候事を以て過料一日沙汰罷下候事
之の事為申渡候一日沙汰罷下候事

一 遠路申渡候事より之の事二日沙汰罷下候事
前日休息候事より之の事三日沙汰罷下候事

一 碓氷頼根人因に申渡候事前日一日沙汰罷下候事
前日休息候事より之の事三日沙汰罷下候事

一 伊國京都江早飛御度合冬一日二時刻限不事
之の事より申渡候事下候事より之の事三日沙汰罷下候事

一 中飛御度七日冬九日此限不事より之の事三日沙汰罷下候事

一 常々飛御度十日冬十二日此限不事より之の事三日沙汰罷下候事
一日但不事より之の事三日沙汰罷下候事

一 教書に 伊賀者法長申給事者不沙汰候事
之の事三日沙汰罷下候事より之の事三日沙汰罷下候事

一 伊賀者申渡候事より之の事三日沙汰罷下候事
一 病死仕候者此より申渡候事より之の事三日沙汰罷下候事

給事は後より分給する事

一酒宴轉賣系體賦賦所見の理を以て後賢より其の若相
背者給事より其の教を以て授戒する事

一火事其の刻を是れ四人一不集火消道具を以て
力の盡す所使に之より所を断りて其の事

一自化神風より火事其の刻を火消道具を以て其の事
防する事

一同火事其の刻を是れ四人一不集火消道具を以て其の事

一火を以て防自今之道具を焼くもの故に其の事

一風吹刻を是れ四人一不集火消道具を以て其の事

一火を以て防自今之道具を焼くもの故に其の事

一火を以て防自今之道具を焼くもの故に其の事

一火を以て防自今之道具を焼くもの故に其の事

右評定より廻相違有る事あり

雲
山月十首

江戸割場

前田對馬

奥村因幡

津田玄菟

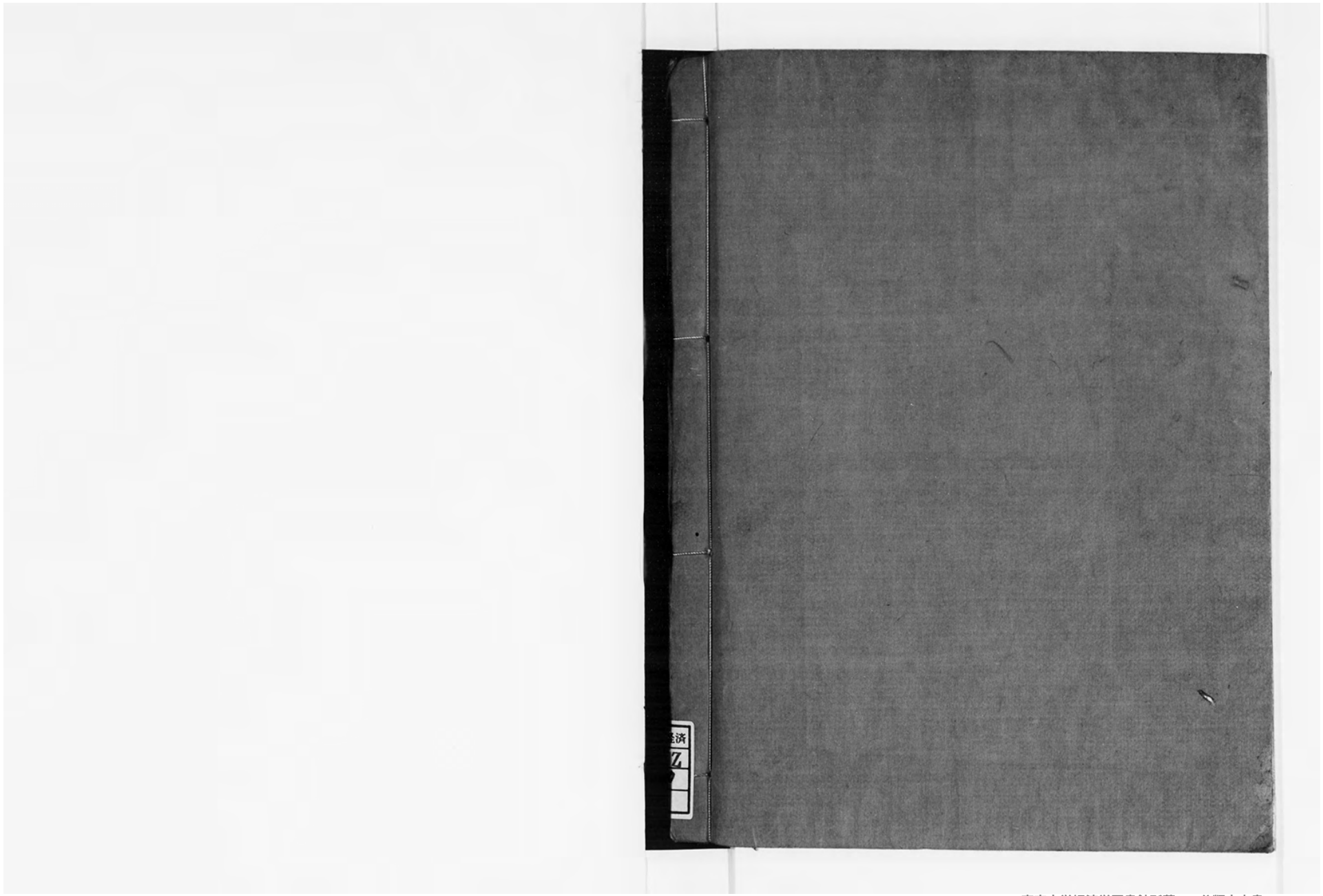
今枝氏部

512

4

5

6



経済
Z
2